

スペイン語圏を知る本（その28）

『スペインの女性群像 - その生の軌跡』

（高橋・加藤編 行路社、2003）

評者 坂東 省次

人間の半分は男性であり、残りの半分は女性である。つまり、人間史とは男性と女性の共同作業の結果であるはずだが、人間史を編べば、男性中心の歴史が流れてきたと言っても過言でない。こうした男性優位の社会の厚い壁に挑戦が始まるのは19世紀のこと、多くの女性の熱い闘いが行われるのは、1970年代以降のことである。

とくにスペインでの女性の解放は、1975年のフランコ政権崩壊による民主主義の到来を待たねばならなかった。そんな中で女性の社会進出が始まり、社会のさまざまな分野で女性の活躍が目立つようになった。当然、女性研究が始まり、20世紀末から21世紀にかけて女性史の研究書の刊行が目についたが、その一つが『スペイン史における女性』（2000）である。256人の女性が「古代」、「中世」、「近世」および「現代」に分けて紹介されている。21世紀最初の年に出された本書の意義は大きい。21世紀は女性の世紀とも言えそうな印象を与える。

今や女性の社会進出は世界的な傾向であるが、日本で世界の女性あるいは日本の女性に注目した本は少なくない。そんな中でスペインの女性で必ず取り上げられるのは、あのコロンブスのアメリカ発見の旅を支援したイサベル女王その人である。近刊の永井路子著『世界をさわがせた女たち 外国篇』（文春文庫、2003）でも、イサベル女王は「新大陸に賭けた名ギャンブラー」として登場している。しかしイサベル女王からわかるスペイン女性史はほんの一部にすぎない。

スペイン史をさまざまなスペイン女性を通してみることによって、これまでとは違った歴史、よくいえば本物のスペイン史がクローズアップされるのではないかという試みの中で出版された『スペインの女性群像 - 生の軌跡』は、文学者、学者、フェミニスト運動家、王妃、宮廷女官、政治活動

家、軍人、テロリスト、女優、タレント、歌手、ダンサー、闘牛士など、じつに幅広い職層から選ばれた23名の女性が「中世・近世の女性たち」、「近代の女性たち」、「内戦時代の女性たち」そして「現代の女性たち」の四つの枠組みの中で語られている。

スペインは伝統的にマチスモすなわち男尊女卑の社会である。女性のマチスモとの戦いは、19世紀に遡る。大学に女性の入学が認められていなかった当時、「近代の女性たち」のコンセプトシオン・アレナールやエミリア・バルド・バサンは男装して授業に出席したという。こうした女性の学問への覚醒は、「自由教育学院」あるいは第二共和制との関わりの中で女性の擁護運動あるいは解放運動へと展開されていくが、内戦そしてフランコ独裁政権樹立によって、スペインは完全なマチスモ社会にもどってしまう。スペインは古くから、闘牛の国あるいはフラメンコの国といわれきた。フラメンコの世界は女性もまた主役であり、パストーラ・バボン・クルスやロラ・フローレスらの女性がフラメンコ史上に大きな足跡を残してきた。一方、闘牛社会は、マチスモの権化といわれるほど閉鎖的で因習的な社会であるといわれる。しかし時代の寵児というべきか、1975年以降の民主主義の到来とともに、闘牛世界にもついに女性の闘牛士が誕生する新しい時代を迎えることになったのである。その名はクリステイナ・サンチェス、「男性社会（マチスモ）の偏見と因習のハードルを想像力と勇気と精神力と優雅さで打破して、正闘牛士に昇格したヨーロッパで初めての女性であった。」

この他、欧州一のパーフェクトレディ「王妃ソフィア」、女性誌の女王「イサベル・ブレイスレル」、祖国バスクに散った女性闘士「ヨイエス」、スペイン内戦の亡命者「マリア・サンブラーノ」、内戦時の反ファシズム文化活動を率いた「マリア・テレサ・レオン」、言葉の情熱の人「マリア・モリネル」など、スペイン社会が生み出したさまざまな女性たちの生の軌跡は、新たなスペイン史像を浮かび上がらせてくれる。

ばんどう しょうじ（教授・スペイン語学）